

# 自由保育の原点を求めて

小川 剛

はじめに

三年前、図らずも、幼稚園にかかわるようになった。それ以来、職務上の必要から、幼稚園関係の事柄に耳目がひきつけられ、また門前の小僧のならいからも、徐々にその知見が加わり、ようやく幼稚園が見えるようになってきた。成人教育学専攻者として、人間の生涯を幼児期から展望できるようになったことは、怪我の功名というべきか。

ここに仰々しい表題を掲げたのも、別に故あつてのことではない。私の所属する園が、わが国における自由保育の発祥の地であり、また長年にわたってそれを守り発展させることを自らに課してきている園であり、そこに身を置く者の基礎的素養として必要なことであると感ずるからである。さらに、いわせていただくなら、今日の幼児教育をめぐる状況を打開し、幼稚園を健やかな人間教育の場として発展させていくためには、自由保育こそ

その保育活動の軸に据えられなければならないと信じるからである。

といっても、ここに書かれることは、これまでの自由保育に関する研究成果を博搜し、その慎重な学問的検討にもとづくものではない。筆者のささやかな教育学的素養にもとづき気づいたことを述べたものにすぎない。これらは、すでに、保育者の間では、常識となっており、何ら新しさを加えるものではないかもしれない。しかし、「遅れてきた」ものには、私のように無知な人もいるかもしれない。そのような人びとにいさかでも役立てばという老婆心から、あえて筆をとった次第。ご寛恕あれ。

## 一、

自由保育というと、幼稚園で幼児を自由に遊ばせる保育形態だと思っている人が、意外に、多い。しかし、その言葉の「自由」は、そのようなことを表わすものとして使われているのであろうか。たしかに、自由保育の形

態をとる幼稚園では、子どもたちを自由に遊ばせている。しかしそれは、目的としてではない。子どもたちのよりよい成長を促すためのいわば方法としてとられていることなのである。すなわち、自由保育を支える理論があって、その要請として、子どもたちを自由に遊ばせているのである。

その理論とは何か。それはフレイベルのそれである。しかし一九世紀前半期のドイツで活躍したフレイベル自身が主張したことだけでは、「自由保育」とはよばれなかったであろう。その後、それに新たな重要な要素が加わったことで、フレイベルの理論は、自由保育に生まれ変わったのだといえよう。フレイベルの理論に「自由」なるものを冠せしめた「新たな重要な要素」とは、二十世紀初頭から、アメリカを中心に、世界的に拡がっていた「自由教育」——より正確には「自由主義教育」——であった。

J・デューイを中心とした理論家たちによって構築されてきた自由教育の理論と実践においては、子どもたち

の自由・自発性・表現・個性等が尊重された。これは、教育と子どもに内在する生命力を伸ばしていく自己創造活動としてとらえるフレーベルの教育思想と原理的に一致する。しかし、「自由保育」の理論は、アメリカにおいて、フレーベルの理論と実践が自由主義思想に照らし、再編成されることで生まれてきたものである。フレーベルの実践のなかには、それが生み出された一九世紀前半期のドイツという社会・政治的条件あるいはかれ自身の認識様式などによって規定されたことから、かれの根本思想と矛盾するような、形式に墮する危険性をはらむものが含まれていた。それらが自由主義教育思想をくぐるなかで、洗い落とされ、二十世紀という新しい精神風土のなかで、本来の伸びやかさを取り戻し、生まれ変わった。それが「自由保育」なのである。したがって、自由保育とは、二十世紀に生きるフレーベルの理論なのである。

## 二、

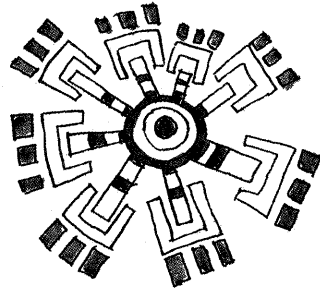
自由保育の意味がわかっただけでは、幼稚園のなすべきことがあきらかになつてこない。そこで、自由保育の成立にかかわつたと思われるJ・デューイに助言を求めると、フレーベルの教育原理の一つとして学校（幼稚園）の仕事は、つぎの三点にあると教えてくれた（「フレーベルの教育原理」、『学校と社会』改訂版、一九一五年所収。以下、これによるところ多い）。

(一) 子どもたちに、お互いに力を合わせ、助け合つて生きていく生き方の訓練を与えること。

(二) 子どもたちの間に、お互いに依存し合つて生きていくという意識が育つようにすること。

(三) 子どもたちがこの生き方を目に見える行為にしておく上で必要となつてくる具体的な対応を行つていくにあつて、かれらを実践的に助けること。

ここで強調されていることは、子どもたちが自分たちの努力で社会関係をつくり出し、またそこで生きていく生き方・態度、それに求められる能力の育成である。このことから、幼稚園を専ら幼児の社会関係にかんする態



度・能力を形成する場ととらえ、そのような観点から幼児教育を行っていった場合、大きな誤ちをおかすこととなろう。というのは、このような社会性の重視の主張の大前提を見落としているからである。フレーベル、デュ

ーイとともに、その教育理論において、児童中心主義の立場を貫き、一人ひとりの子どもを教育活動の中心に据えている。子どもたちは、その成長の過程で、内在する力に促され、自らの努力と保育者の適切な助力とによって、独立した個人として生きていくのに必要な態度・能力を形成していく。社会性重視の背後には、このような事実が大前提としてある。

個人に焦点を当てた活動が、社会関係を捨象したところで、持続的に展開されていくとすれば、その結果、独善的な人間が形成され、またその態度・能力も実践性を欠いたものになってしまうおそれもないとはいえない。このような警告が、社会性重視の主張のなかにかくされているといえよう。というのも、人間は、究極的には、社会、すなわちさまざまな人間関係のなかで生きていかなければならない存在であり、子どもの教育も、そこでよりよい成員となり、そこで一定の役割を担っていくことができるようになることをめざすものでなければならぬからである。

個人に重点を置きすぎると、往々にして、社会関係が見落とされがちである。そのようなことから、フレーベルも、デュイも、幼児教育において、社会性の涵養を強調したものと思われる。

### 三、

J・デュイが、フレーベルのなかに見出した第二の教育原理は、

「すべての教育活動の主要な根は、子どもたちの本能的・衝動的な態度と活動のなかにあるのであって、外部の材料（教材）の提示や応用のなかにあるのではない。したがって、子どもたちの無数の自発的な活動、すなわち、遊び・ゲーム・模倣・幼児のみたところ無意味な動きなどが教育方法の礎石なのである」（前掲書、一一二頁）

というものである。これは、教育活動の主要な源泉は子どもたちのなかにある生得的のものであり、それを出発点として教育活動が展開されるという主張であり、まさ

に自由保育を支えるものである。この自明の理ともいべきことも、人間の教育について考察するにあたって、きわめて重要な意味を帯びてくる。というのは、この主張の根底には、人間をかけがえない生命と個性をもつ存在としてとらえる人間観があり、またそれは、教育の内容・方法を決定していく重要な要因であるからである。

さて、この主張がなされた二十世紀初頭、これと対照的な主張がみられた。それは、いわゆる科学的決定論に立つ教育学者のものであった。ここでは、教育活動を「学校を工場に、教師を労働者に、生徒を生産品に当て、なるべくエフィシエントな操作を経て、多量な教育的生産物の製造」（大田堯『近代教育とリアリズム』、一二八頁）と見立てられた。これは、なにごとも能率本位に処理することを好むヤンキーイズムの産物ともいえるが、二十世紀末、さまざまな教育手法・機器が開発され、「教育」の成果が年商で語られるように「産業」化がすすんだわが国の現状では、益々、支持者を増す可能

性のあるものである。ここにみられる人間観は、人間とは工作者の意思と行動とによって、いかようにも工作しうる無機物に近い存在というものである。生命あるものであっても、その発現したのもも工作者の意思と行動と具体化する契機としてとらえられる。

たしかに、植物は、温室や工場でも、栽培される。しかしそれは、その植物本来の生命と特性を尊重してのことではなく、それらを他の目的とするために利用するだけである。養鶏場のニワトリは、余分なエネルギーを費さないように、両翼は切り取られ、与えられた餌を必要最小限度食べ、不毛な卵を産むことに専念させられる。このようにされたニワトリは野に放たれても、自力で生きていくことができず、のたれ死するという。これは、本来の存在形態を奪われ、他のもの的手段とされたものの悲しい末路である。これは、人間以外の生物の話であるが、かつて奴隷制度下の奴隷の生活も似たような運命を与えられたものだったといえよう。

フレーベルの人間観・教育観は、これと鋭く対立す

る。かれは、人間のなかに、かけがえない生命、そこに統一者・神の存在を認め、「その内的な法則を、その神秘的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが人間の教育である」(『人間の教育』、岩波文庫・上、一三頁)としてい

る。このような神秘性に立つ人間観・教育観が、そのままで、現代人に十分納得されるとは思わない。しかし、いかに科学が進歩しようとも、人間存在のなかにある不可知な部分がすべて究明し尽されることはありえない。かりに個々の精神活動が物質の化学変化として説明されたとしても、それらを総合させ、全体的なバランスをとって生命活動を持続させていく人間。貧しさのなかにあっても、真善美の探究という高い精神活動を行っていく人間、その素晴らしさは、畏敬の念をひきおこす。

人間存在にかかわるものは、すべからず、生命の神秘性、自意識をもって自分の人生を創造していく主体者としての人間の尊厳とを肝に銘じて行動することが必要で

ある。フリーベルは、人間形成の出発点にあって、その重要性を再確認したかったのであろう。その点でも、自由主義教育は共通したものをもっている。

人間形成にあたって、人間に内在する力を効果的に実現させ、判断・行動主体としての人間に求められる態度・能力の形成を図っていく。というのは、それらは、核となるものに、必要な時、必要なものを付け加え、時には、新たな段階に即応するようにそれらを再編成するということを通して、発達していくからである。核のないところには、真の形成はありえない。そしてその核とは、人間の生命を維持・発展させるため、“自然”によって与えられた生得的なものである。この生得的なものを充実・発展させることが、幼児教育の眼目なのである。

(お茶の水女子大学)

